

# ダーリン・サンライズ残業

をしていただけなのに

～流離さりすらいのS級探索者と噂になってしまいまして～

4

著 KK ill riritto



ジュラ

野性味溢れる  
脳筋探索者。

フォーマルハウト

人類殲滅を企てる  
自称神。

ジミ子

ブラック企業を  
脱した探索者。

アゲハ

政府機関所属の  
プロ探索者。

わたり ひなた  
渡陽向

探索者ネームは「影狼」。  
サービス残業のストレスを  
ダンジョンで解消していた  
ところ、凄腕探索者として  
バズってしまった青年。

主な登場人物

俺の名前は渡陽向。<sup>わらひなた</sup>

サービス残業当たり前、鬼上司に扱き使われる日々を送る限界社畜だつた俺は、ある夜、ダンジョンで人気配信者シュガアを危機から救つた事により世間で大バズり。

それを切つ掛けに会社を辞め、配信者——影狼として生きていく事にした俺は、探索者スタイル『歌姫』<sup>うたひめ</sup>のシュガアを始め、『猫暗殺者』のトーカさんや『猫戦士』のミケさん等、人気配信者達とも次々にコラボし、世界中に存在を知られていく事となつた。

それに政府直属の対ダンジョン・魔獣特務機関、通称タイマとも契約する事になり、名実共に流離<sup>さすら</sup>いのS級プロ探索者としても認められた。

そんな俺が現在挑戦しているのは、日本のダンジョン探索者、その実力ナンバーワンを決める大会——KING OF DUNGEON EXPLORER——通称KODである。

歌舞伎町ダンジョンで行われた二次予選は、他参加者とタッグを組んでのチーム戦。

そこで俺とコンビとなつたのは、ブラック芸能事務所『ヘイブン・ランナー』に所属する不幸な少女、黄泉のジミ子さんだつた。

俺に敵意を燃やす若者——カガツチ、宝箱に並々ならぬ愛情を持つ人物——宝箱アケオ等、個性の強いライバル達と競い合いながら、俺は彼女と共に二次予選を圧倒的な記録で突破する事となつた。

予選突破後、ジミ子さんはヘイブン・ランナーの社長に、会社を辞め、独立する事を宣言。憑き物の落ちた表情を浮かべるジミ子さんを見て、俺はかつての自分を思い出し、応援する事にした。

その後、ペツトとして共に暮らす事になつたフェンリル達と日常を過ごしたり、KOD絶対王者の天才少女——ヒバナとひよんな事からコラボ配信したりしている内に、遂にKOD決勝ラウンドの日がやつてきた。

舞台は、都内最高難易度に認定された超危険区域、有明東京湾ダンジョン。

共に予選を突破したシユガアやジミ子さん達、そして、俺を尊敬し「王者にするためサポートする」と言う青年——蘭も仲間に加え、新たな冒険へと身を投じるのだった。

# KOD決勝編

## 第一話 KOD決勝ラウンド直前

「さて……いよいよか」

KOD決勝ラウンド——開幕式。

豪華客船内のパーティー会場で行われた開幕式は、四十九名の参加者を各船艇に振り分けるくじ引きと、最高責任者多木さんの簡単な挨拶を経て、瞬く間に終了した。

そして、客船を出た俺達はそれぞれの船へと向かう。  
船は全部で七隻。

自動操縦で目的地点へと向かうこの船に、四十九名が七名ずつに分かれ乗り込む事になる。

ちなみに、くじ引きの結果——俺が乗り込むのは第三艇となつた。

「蘭と同じ船になれたのは幸運だつたな」

「ええ、本当に」

俺は、一緒に第三艇へと乗り込む仲間——蘭を振り返つて見る。

彼も、くじ引きの結果俺と同じ船になつたのだ。

「では影狼さん、ご武運を！」

「私達も頑張ります！」

「ああ、みんな頑張ろう」

シユガア、ミケさん達とは一旦別れる形となつた。

「影狼。向こうで合流できたら、一緒に行動していい？」

絶対に邪魔にはならないから……」

「問題ない」

おずおずと尋ねるトーカさんに、俺は答える。

「もし出会えたら、共に行動しよう。俺は大丈夫だ」

「ほ、本当……!?」

「やつたね、トーカちゃん！」

「約束ですよ！ 絶対に生きて会いましょうね！」

港にて、俺達は互いに健闘を祈り、別れる。

俺と蘭は、停泊する第三艇へと向かう。

「あ、か、影狼さん……」

「ジミ子さん」

そこで、ジミ子さんとも遭遇した。

先程のくじ引きで、ジミ子さんが引き当てたのは第二艇。ちょうど、一つ隣の船だつた。

「お、惜しかつたです。あと一つ数が違つたら、影狼さんと同じ船だつたのに……」「こればかりは運だ。仕方がない。向こうで合流できる事を祈ろう」

「は、はい！」

ジミ子さんは、気合いを込めるように拳を握る。

「絶対に生き残つて、上陸してみせます……！」

「そんなに気負う必要はない。そつちの船には、頼りになる実力者も多い。きっと助けてくれるはずだ」

「そうですわ！」

そこで、いつの間にかジミ子さんの背後に立つっていた女性が大きな声を上げた。

突然の爆音に、ジミ子さんも驚いて飛び上がる。

「め、メアリーさん……！」

「同じ船になれて嬉しいですわ、ジミ子ちゃん！」

彼女——自称・清楚系お嬢様探索者、鈴木メアリーローズさんは、ジミ子さんの手を取つてぶんぶんと振るう。

メアリーローズさんも、ジミ子さんと同じ第二艇になつたのだ。

「よ、よろしくお願ひします……」

「ふふふ、安心してジミ子ちゃん。運命に引き裂かれ、想い人と離れ離れになつてしまつたのはわたくしも同じ……！ ジミ子ちゃんの気持ちは痛い程伝わりますわ……！」

「……ふえっ!? お、想い人……!?」

「力を合わせて、モンスター蔓延する魔の海域を突破しましょう!」

「あ、あの、別にそういうわけでは……」

「待つていてくださいまし、玄閻さま〜〜! 運命の再会を楽しみにしていますわ〜!」

「何やら楽しそうに叫んで、メアリーさんはジミ子さんと共に第二艇へと乗り込んでいった。

「んだよ、騒がしい奴等と同じ船になつちまつたな……」

そこに、頭を搔きながらやってきたのは——カガツチだった。

「カガツチ……君も第二艇だつたな」

「ああ、覚悟しとけよ、影狼。向こうに着いたら容赦しねえからな」

「わかつた。だが、それは無事に上陸できたらの話だ」

俺は、カガツチの目を真つ直ぐ見据えて言う。

「その前に脱落するなんて、つまらない結果にはなるな。全力で生き残つてこい」

「……言つてくれんじゃねえかよ。上等だ」

カガツチは闘志の宿つた目で俺を睨み、微笑すると、意気揚々と第二艇に乗り込んでいった。

「上手く煽りましたね、影狼」

「……本当は素直に『ジミ子さん達をよろしく頼む』と言いたかつたが、俺が言つて聞く奴じやないからな」

俺に対抗心を燃やしているカガツチ相手には、ああいう言い方の方が効果的だろう。

ともかく、上陸まで全力で戦つてくれるならそれでいい。

「さて、影狼。そろそろ俺達も」

「ああ」

開始時刻が迫つてゐる。

俺と蘭も、急いで第三艇へと乗り込む。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

第三艇に乗り込むと、俺はドローンカメラを起動し、中断していた『影狼チャンネル』の配信を再開する。

ドローンにセットしたスマホの画面に、視聴者のコメントが流れしていく。

〈お、再開した!〉

〈影狼と蘭は第三艇だったよな〉

〈まさかくじ引きで一緒になるとは……これが、赤い糸で結ばれたコソビって奴か……〉

「イエイ」

コメント欄に反応し、蘭がカメラにビースサインしている。

お前、そんなキャラだつたつけ？  
まあ、それは置いといて……。

「さて……」

有明東京湾ダンジョンへと向かう船の構造は、簡単に言うと漁船に近い。  
搭乗した参加者達は、屋根も壁もないデッキの上に集まっている。  
この船は自動操縦のため、操縦者もいない。

俺は同じ船に乗った仲間——蘭以外の五人を確認する。

「や、影狼。同じ船になるなんて、最高だね」

一人目——ボーグシユな見た目の女の子が、俺を振り返つて嬉しそうに手を振つている。

KODの『絶対王者』——ヒバナだ。

「ヒバナ、いくら影狼と戦う事を望んでいるとはいえ、船の上でやり合うようなマネはするな。常識的に行動しろ」

二人目——黒髪の一部を白く染めた、クールな青年。

『シャイニーの風紀委員長』……だつたか？

音夜だ。

「これはこれは、どうも、影狼さん」

「玄間さん」

三人目——は、顔見知りだつた。

ドレッドヘアに、タイムの制服である黒いスーツ姿。

にこやかな笑顔を携える……しかし、油断ならない人物。

プロ探索者——第六部隊副隊長、玄間一巳さん。

「まさか影狼さんと同じ船になれるとは、俺は幸運ですね」

「こちらこそ。玄間さんと一緒に心強いです」

穏やかな口調だが、本心が見えない。

タイムの隊長である葉風さん曰く、この人は俺を敵視する派閥の人間。

二次試験では、その能力のほとんどを見せる事なくここまで進出してきた。  
確かに俺の実力を探り……何を仕掛けてくるかわからない。引き続き用心はする。

さて、この三人はここまで少なからず接触のあつた参加者達である。  
残りの二人は、完全に初対面だ。

「なんだあ？ みんな体がほつせえな。食つちまうぞ」

四人目——巨大な人物がいる。

身長は見たところ百九十近く、体格も良い。

伸びし放題に伸びしたような紅色の長い髪。

鋭い牙のような、真っ白な歯を見せ挑発的に笑つていて。

性別は女性だ。

巨大……と表現したのは、その体の大きさに加え、野性的な雰囲気というか、オーラも手伝つて

の事だろう。

「白亜ジユラ。ランキング五位。以前お伝えした、優勝候補者の一人です」  
蘭が俺の耳元で囁く。

〈白亜ジユラだ。相変わらず『テケエな』

〈俺よりも『テカイ』……〉

〈並大抵の男より……というか、並大抵の人間より『テカイ』だろ〉

〈日本人離れしたサイズ〉

〈前評判でも、パワーだけなら影狼やヒバナより上だって言われてるくらいだしな〉

白亜ジユラ……そういえば、二次予選ではトーカさんと同じ会場に参加していて、タッグを組んだんだつたか?

「我が強い人物だと聞いていたが……なるほど、見た目からもその感じが伝わってくる。

「あ、お前、影狼か? 影狼だろ」

そこで、白亜ジユラが俺を見る。

〈あ、見付かった〉

〈ヒエツ〉

〈やばいぞ! ダンジョン界隈では、『白亜ジユラ』に興味を持たれたら、野生の熊と遭遇したものと思え』って格言もあるくらいだ!〉

〈猛獸扱い WWW〉

〈か、影狼なら大丈夫だろ、フェンリルも手懐ける程だし……〉

「お前のダンジョン配信、観たぜ。お前、強いな。ちつちええくせに。面白そうだ」

「はあ、どうも!」

「オレと遊ぼうぜ? どつちが多くモンスターぶつ倒せるか。喧嘩でもいいぞ? でも島についてからな。海の上だと危ねえからな」

「…………」

……なんだか、人間の言葉を話せる大型犬と喋つてるみたいだ。

「駄目だよ、ジユラ。影狼はボクの相手なんだから。横取り禁止」

「なんだよ、ヒバナ。邪魔すんなよ。食つちまうぞ」

「喧嘩はやめろ。既に配信も始まってるんだぞ」

何やら衝突を始めるヒバナと白亜ジユラ、それを呆れながら仲裁する音夜。

「…………」

その人物は、デッキの端に腰を下ろし、他の参加者達が騒ぐ中でも微動だにしていない。

フード付きのコートを着込み、頭をフードで覆つて隠している。顔はよく見えないが……おそらく瞑目していると思われる。寝ているのだろうか？

「彼がゴーストです」

蘭が言う。

「あれ、誰だ？」

「ゴーストだよ、ゴースト。優勝候補ランキング三位だぞ」

「初めて見た」

「俺も」

「個人チャンネルでも、ほぼ顔出ししないしな」

「なんか、近寄りがたい空気が……」

「ランギング三位。謎に包まれた人物……こうして本人を前にしても、やはり得体が知れませんね」

「……ああ」

だが……。

俺はゴーストを見る。

座つたままの姿勢で、全く動かない。

けれど、周囲に神経を張り巡らせて警戒しているような……そんな気配は感じる。なるほど、蘭の言うとおり只者ただものではなさそうだ。

「どうも」

とはいって、同じ船に乗った者同士だ。

挨拶くらいはしておくべきだろう。

俺はゴーストに近付き、声を掛ける。

「影狼がゴーストに話し掛けた！」

「勇気あるな……」

「いや、影狼だからこそ話し掛けられるんだよ」

「なんかドキドキするの……」

「影狼です。上陸するまでの一時的な仲間ではありますが、よろしくお願いします」

「…………」

ゴーストは、座つた姿勢のまま微妙に顔を持ち上げる。

相変わらずフードで隠れて表情は見えないが、俺を一瞥いちべつした事はわかつた。そして、ペコッと小さく頭を下げたのもわかつた。

〈ゴースト、ちょっと反応したなww〉

〈挨拶した……のか?〉

〈なんだこれww〉

〈もしかしてゴースト、意外と意思疎通ができる?〉

コメント欄の言うとおり、こちらから声を掛ければ反応を返してくれる程度には、ゴミユニケー  
ションは取れそうだ。

俺は今一度、第三艇のメンバーを見回す。

俺の身内であり、協力者の蘭。

王者ヒバナ。

冷静な参謀タイプの音夜。

タイマの玄間さん。

猛獣系探索者の白亜ジユラ。

正体不明のゴースト……。

「っというか、ちょっと待って? 今更だけど、この船、優勝候補者フンキングの上位ベストファ  
イブが同乗してるとかよ! -ww -

〈影狼、ヒバナ、ゴースト、音夜、白亜ジユラ……それに、影狼のサポーター蘭君に、AランクP  
ロ探索者の玄間さん〉

〈戦力が一極集中しすぎィー!〉

確かに、クセも強ければ戦力値も高いメンバーが集まつたものだ……と、俺も思う。

〈まあ、俺は楽しいから良いけどー〉

〈同意ww〉

〈この船、見所しきなさそうだなww〉

〈実況掲示板も第三艇の話題ばっかりだしな〉

〈俺はこの船の配信に貼り付くぜー!〉

『皆さん、お待たせいたしました』

そこで、デッキの後方に備え付けられたスピーカーより、実況の百舌<sup>もず</sup>沢<sup>さわ</sup>ハヤニさんの声が聞こ  
えた。

『全参加者の搭乗を確認しました。これより、皆さんを乗せた船が有明東京湾<sup>ダ</sup>ンジョンへと出航  
します』

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「うおおおおー・見えてきた!・」

「あれが、東京湾ダンジョンを囲う海上防壁か……」

「今更ながら、やっぱやべえ場所なんだな、東京湾ダンジョン……」

潮風を切り裂き、海上を進む船。

遠方に見える海上パーキングエリア——海ほたるを眺めている内に、俺達を乗せた船は目的地へと到達していた。

まるで城壁のように、海の上に浮かぶ金属製の柵。

この柵は東京湾ダンジョンを囲うように設置されたもの。

ここを越えた瞬間、その海域から東京湾ダンジョンの第一階層が始まる。

「他の船は見当たりませんね」

「それぞれ、大分、距離が離されたようだな」

蘭と俺は、周囲を見回しながら話す。

周りの海上に、他の船は見えない。

七つの入り口からそれぞれ上陸するという話だったが、結構離れ離れのようだ。

まあ、今は他の船の事を気にしていても仕方がない。

「で、もう入つていいのか？　この柵、ぶち破つていいのか？」

「いいわけないだろ。自動で入り口が開く。それまで待て」

腕をグルグルと回し既に戦意全開の白亜ジユラに、音夜が呆れながらつっこむ。

彼の言うとおり、やがて金属柵の一部が門のよう開いた。

俺達を乗せた船は、そこに入していく。

柵は三重にできており、一枚目の門が閉じてから、二枚目の門が開く。

そしてそこを通過すると、最後の三枚目の門が開く。

「うおお、厳重な作り……」

「ここから先はマジで魔界つて感じだな」

「わくわく……」

「わくわくじドキドキが半分ずつ……」

「東京湾ダンジョン相手に、このメンバーがどこまで行けるのか楽しみだ」

『有明東京湾ダンジョン、第一階層、周辺海域に進入完了しました！』

三枚目の門が閉じる。

遠方には、小さな島が見える。

あそこが東京灣タンシン。

スピーカーから、ハヤニさんの声が響いた。

皆さん、ご武運を祈ります！」

瞬間、第三艇のデッキに搭乗する七人——全員の体がスパークする。《換装》の光だ。

一瞬後、そこには探索者の姿と化した俺達が立っていた。

「影狼、早速ですが……」

蘭と音夜が、同時にそろそろ来た。

蘭と音石が同時にその発見力

遠方、海原を切り裂きながら、何かがこちらへと迫つてきている事に。

〈何かいきなり来た!?〉

# うおおお、 海棲のモニ

「俺、深海恐怖症なんだよな……」

（来るぞ来るぞ来るぞ……）

瞬間、俺達の乗る船の真正面、海上に飛び出したのは巨大なサメだった。  
何百、何千という牙が生え揃つた大口を開けて、甲高い雄叫びを上げて飛来してくる。

「サメだああああ！」

「いきなり映画みてえるのが来た！」  
（馬鹿が）

「馬鹿元氣だ！」

卷之三

「影狼、いきなりギガマウス・シャークです。他のダンジョンなら、『下層』クラスのモンスターです

「問題ない」

蘭の声を聞くと同時に、俺は既に動いていた。

〔斑切り〕 腰に佩いた一振りの愛刀〔沙霧〕を抜き、デツキの床板を蹴る。  
〔まだらぎ〕

——そして襲来したギガマウス・シャークを、空中で三枚におろした。

影狼が行つたああああ！

〈ヘイお待ちー!〉

〈おいおいおいおい一撃だよ!〉

空中で切断されたギガマウス・シャークの体が、第三艇の上空を通過して後方に着水する。

俺はデッキの上に着地し、前方を睨む。

〔流石さすがです、影狼けいろう〕

〔油断するな、蘭。来るぞ!〕

〔ええ!〕

俺の隣に立つ蘭が、俺と同じように前を向く。

探索者たけコスチュームへの換装を終えた今いまの彼は、白いコートを纏まといっている。

丈の長いコートを翻ひるがえす姿は、さながら医者いしかずのようだ。

〔ドクター!〕

それが、蘭のスタイルである。

〔複数のモンスター達が、次々にこちらへと接近してきて います!〕

蘭の言うとおり、突き進む船に向かつて前方から海棲モンスター達が迫つてきている。

ぴょんびょんと海上に姿を現したり、もしくは背びれ等の体の一部だけが見えたりと、視覚情報は断片的で把握が難しい。

だが、蘭の情報力と分析力を駆使すれば、何がいるのか見抜くのは容易たやすいいようだ。

「把握できた敵は三種類。素早い遊泳速度を持ち、海上の敵に弾丸のように飛び掛かつてくる、鋭い牙を持つた魚型のモンスター——弾丸ピラニア。体を高速回転させ手裏剣のように斬りかかつてくるヒトデ型のモンスター——ソード・スターフィッシュ。特殊な歌声で幻覚を見せたり、洗脳だますをもたらしたりする人魚型のモンスター——セイレーン!」

〈え、この数秒間で、そこまで敵の情報を分析できたの?〉

〔蘭君、流石!〕

〈海中を泳ぎ回ってる敵を海上から把握するなんて、神業かみわざ過ぎない?〉

〈端的な情報から見抜いたんだろ。情報量の勝利だな!〉

感心するコメント欄。

そんな蘭の分析通り——海中から次のモンスター達が襲おそい掛かつてくる。

〔キシイイイイ!〕

剣山けんざんのような牙を剥いて飛来してくる大量の小魚——弾丸ピラニアの群れだ。

〈うわわあああ、弾丸ピラニア!〉

〈弾丸つづうか、これもうマシンガンの掃射そうしゃじゃん!〉

〈なんで淡水魚が海にいるんだよ、ふざけんな!〉

コメントの言うとおり、群れで襲来してくる弾丸ピラニアは、正に機関銃の掃射に等しいだろう。だが、こちらには日本最高峰の実力を持つダンジョン探索者が揃っている。

「はっ！ なんだ、ちっちゃえ魚ども！ 怖くねえぞ！」

白亜ジユラが咲笑を上げて、吠える。

換装を終えた彼女は、その巨体にピッタリとフィットしたボディースーツを纏つたような格好となっている。

弾丸ピラニアの群れは、真っ先に彼女へと襲い掛かっていく。

「弾丸ピラニアは人間を捕食します。餌として、大柄な白亜ジユラを優先して狙うのは自明の理」

その状況を前に、蘭は冷静に呟く。

「ですが、彼女にとつては全く問題ないでしよう」

刹那、白亜ジユラの伸ばした右腕が、変貌した。

大きく膨れ上がり、右腕は鱗に覆われた強靭な前足に形を変える。

手首から先も、太い爪の生えた人外の手に変わっていた。

「オラアツ！」

白亜ジユラは右腕を振るい、飛来した弾丸ピラニアの群れを、まるで羽虫を払うように吹き飛ばした。

「一閃で、何十匹もの弾丸ピラニアが肉塊となり宙に散る。

〈うおおお！ 出た！ スタイル——《ティラノサウルス》！〉

〈体を恐竜に変身させる、白亜ジユラの戦闘形態！〉

〈すげえパワー……〉

「大雑把ですが、圧倒的ですね」

流れ弾で飛んできた弾丸ピラニアを沙霧で切り払う。

蘭も、指と指の間にメスを挟んで投擲し、空中でピラニア達を仕留める。

「なるほど……確かに、パワーは一級品だ」

「ウラウラウラウラア！」

海中から次々に飛び上がつてくる弾丸ピラニアを、白亜ジユラは変化させた体で難ぎ払つていく。

「おつと」

デッキの上で、ヒバナがひらりとステップを踏んだ。

換装した今のヒバナは、西洋風の服に、長い白色のマフラーを首に巻いている。

そして、背中には大きな剣を背負つていた。

古風だが、どこかオーラを感じさせる格好だ。

「気を付けて、音夜君。何かいるよ」

「……ソード・スターフィッシュだ」

一方、音夜の方は、雪国で着るような厚手のコートを纏っていた。

「途轍もない速度で空中を飛び回っている」

「うん、でも躊躇しない程じゃないよ。ボクの目ならギリ追える」

「……弾丸ピラニア以上の速度だ。普通の人間なら目で追える存在でもないんだが……まあ、お前

や——影狼なら見えるのか」

音夜が、チラリと俺の方を見た。

俺もまたヒバナ同様、空中を飛び回るソード・スターフィッシュの攻撃を躊躇し、そしてすれ違ひざまに切り落としていた。

「やはり怪物だな、二人とも。だが、俺は俺のやり方で対処する」

言うと同時に、音夜の両手から白い靄が上がる。

どうやら、それは冷気のようだ。

次の瞬間、音夜の周囲を旋回<sup>せんかく</sup>していたソード・スターフィッシュが、空中で凍り付き<sup>こじる</sup>デッキの上へと落下した。

「凍った！」

〈スタイル——《氷使い》。どんなだけ速くても、音夜さんに近付いたら一撃で停止だな〉

「ねえ、影狼、影狼」

そこで、ヒバナが俺を呼ぶ。

彼女は既に船の上にはおらず、海上に飛び出していた。

よく見ると、海上を飛び回る弾丸ピラニアやソード・スターフィッシュを足場にして跳躍しながら、背中の大剣を振り回しモンスター達を狩っている。

「これができる？ 一緒に遊ぼうよ」

「……いいだろう」

俺とヒバナの対決を楽しみにしている視聴者も多いため聞く。

ヒバナの誘いに、あえて乗つてやる事にした。

俺も同じように、海中から飛び上がつてくるモンスター達を足場に空中で飛び回る。

「アハハ！ やつぱり、影狼ならできると思った！」

〈何何何何ww 何やつてんのこの二人ww〉

〈ちょっと何やってるかわからんないですね〉

〈何って、目で追えない程高速で襲い掛かってくるモンスター達を足場にしながら、空中で飛び回ってるだけだろ？ は？ バケモノか？〉

〈この一人だけ次元が違うぞww〉

「あ！ ズルいぞお前等！ オレも混ぜろ！」

そんな俺達の姿を見て、白亜ジユラも空中に飛び出す。

「んぎやつ！」

しかし、俺達程の動体視力と俊敏性を持ち合わせていないため、そのまま海に落ちた。

〈何やつてんだジユラああ！〉

〈おい、落ちたぞｗｗ〉

〈誰か助けてあげてえ！〉

「……仕方がない奴だな」

俺は、海に落下した白亜ジユラの方へ向かおうとする。  
その瞬間だった。

「コオオオオオオオ……」

海上を縦横無尽に飛び回り、モンスターを撃墜していく俺とヒバナに、何か波動のようなものがぶつけられた。

「おつと」

「わつ」

ギリギリで直撃を回避した俺とヒバナは、その攻撃の主を見る。  
数十メートル先の海上に、数匹の人魚の姿があつた。

下半身は魚、上半身は人間の女。

「コオオオオオオ」

真っ黒な目でこちらを見て、開いた口から歌声を発している。  
セイレーンだ。

「気を付けてください、影狼、ヒバナ。セイレーンの歌声は、直撃すると脳まで浸透し、幻覚作用を引き起こします」

「デツキの上から、蘭が叫ぶ。

「だ、そうだ、ヒバナ。気を付ける」

「もう、面倒くさいな」

そこで、ヒバナは空中で身を翻し、セイレーン達の方に右手を向ける。  
「邪魔しないでよ」

その右手に光が走った——と思った瞬間、膨大な発光。  
稻妻いなづまが発生。

放された雷いのちが、セイレーンの群れを一気に飲み込み、消し炭へと変えた。

〈ひええ……やつぱすげえな、スタイル——《勇者》〉

〈なんだかんだ言って、圧倒的なポテンシャルを持つてゐるからな〉  
〈スタイルガチャSSRなだけある〉

セイレーンを焼き払つたヒバナ。

その姿を一瞥し、俺は再び船に着地する。

「つと」

「お帰りなさい」

ちようど、玄間さんがいた。

今の彼は、スタイル——《侍》。

その名に相応しい和装を纏つてゐる。

「大事なかつたですか？」

「ここまで強力なモンスターが相手では、力を温存してゐる暇もないですね」

襲来する弾丸ピラニアを、居合で切り落としていく玄間さん。

ばやきつつも、その抜刀の速度はかなりのものだ。

〈やべえ……やつぱこの船、やべえよ〉

〈どいつもこいつも怪物過ぎる〉

〈なんじやーのペーティー〉

〈他のダンジョンなり《中層》クラスのモンスターの群れが、まるで相手になつてねえ〉

〈全七隻の中でも、この船が最速で島に接近してゐみたいだぞ〉

〈つていうか誰か早くジュラを助けてやれよwww〉

〈絶対に優勝者はこの船から出る！ 間違いない！ 外れたら桜の木の下に埋めてくれていいよー〉

盛り上がるコメント欄。

確かに現状、この第三艇の戦況は全く問題ない。

そこそこ強力な海棲モンスター達を相手に、苦もなく進行できてゐる。

〔陸地ももうすぐですね。影狼、島に上がつた後の行動はどうしますか？ 他の船のメンバーとの

合流を優先するのは、距離の関係で難しいと思いますが〕

「そうだな」

俺と蘭は、先んじて上陸した後の事を相談していた。

その時だった。

〈ん？〉

〈あれ、第二艇が……〉

〈お？ どうした？〉

〈いや、なんか様子が……〉

影狼チャンネルのコメント欄に、何やら気になる反応が流れ出した。

第二艇……。

ジミ子さん達の乗つている船だ。

〈え、なんだあれ〉

〈何、どうし……〉

〈あれ、待って待つて、やばいやばいやばい〉

〈おい、どうした！ 第二艇で何があったー！〉

〈影狼！ ジミ子が！〉

「……蘭」

俺は、蘭に声を掛ける。

「はい」

「お前のスマホで……誰でもいい。第二艇の乗船メンバーの配信チャンネルを確認してくれ」

俺は遠く——海原の先へ視線を向ける。

何か……嫌な予感がする。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

——時間は、少し遡る。

「フランツ！」

有明東京湾ダンジョン、周辺海域へと突入した第一艇。

その「フランツ」の上では、他の船同様、襲い来るモンスター達との死闘が起っていた。変身後のアーマー形態で拳を振るうのは、カガツチ。

襲い来る弾丸ピラニアやソード・スターフィッシュを、空中で打ち落としていく。

「ひやあ……す、すじ」

「身を隠して、ジミ子ちゃん……！」はわたくしにお任せですわ！」

『靈能力者』の格好となつたジミ子を守るよう、『喧嘩師』のメアリーローズが立ちはだかる。トゲだらけのメリケンサックを振るい、彼女も次々にモンスターを倒していく。

カガツチ、ジミ子、メアリーローズ以外の四人の参加者も同様だった。

流石に、第三艇程楽勝という雰囲気ではない。

皆が少なからず体にダメージを負っている。

それでも、直接攻撃に特化し、タフさが売りのメンバーが揃つたこの第二艇は、弾丸ピラニアやソード・スターフィッシュと相性が良かった。

更に——。

「あ、メアリーゃん！ ちょっと行つてもおもーーー。」

ジニア子のスキル——【幽体離脱】。

彼女の能力も、手の回りなし部分をサポートするのに最適だった。肉体から抜け出た靈体のジニア子は、遠距離から歌声で攻撃を仕掛けようとしているセイレーンの群れに到達。

一体のセイレーンの体を乗つ取り、仲間に歌声をぶつけた。

突然の仲間割れによりセイレーンの群れは混乱し、戦闘といひでせなくなる。

「流石ですわー、ジニア子ちゃんー！」

『えへへ……』

セイレーンの体から出た靈体のジニア子は、海の上でメアリーローズに手を振る。まあ、彼女から靈体のジニア子は見えていないのだが……。

『……えへー。』

その時だった。

ジニア子は、「その存在」に気付いた。

第一艇の十数メートル先——海の上に、一人の影があった。

「あ？」

「なんだ、ありや」



第二艇のメンバー達も、それに気付く。

海の上に立つ存在。

人の形をしている。

しかし、全身が影のように真っ黒だ。

頭部——顔の位置に、真っ赤な丸い目が二つ並び、第二艇の方を見ている。

その両手の手首から先は、刃のように鋭い形状をしている。

『あれって……』

突如現れた異常。

突如現れた異形。

しかし、その存在を見た時、ジミ子にはある人物の姿が重なって見えた。

その異形の立ち姿、雰囲気。

まるで……そり、まるで……。

どいか、影狼のような——。

——次の瞬間、海の上からその異形が姿を消した。

「え？」

そして、気付いた時には——そいつは第二艇のテッキの上に立っていた。一人の参加者が、遅れて気付き、振り返る。だが、その時には。

## 第二話 アンノウン

〈へ?〉

〈は?〉

〈え、何……〉

——その参加者の首が切断され、テッキの上に落下していた。

一瞬、何が起こったのか、誰も理解できていなかった。第二艇に乗船した参加者達も、彼等の活躍を視聴していたオーディエンス達も。しかし、直後——。

〈うわ、ああああああー、首ー、首ー〉

〈首斬られたー〉

〈エータが！ エータがやられたー〉

〈なんだ、こいつー、速過ぎるー〉

KOD運営公式配信、個人チャンネルの生配信画面。

その光景を目にしていた者達により、「メント欄が阿鼻叫喚あびきやかげんと化す。

「な、んだ、よ……」

第二艇——船上。

そのデッキの上に立つ参加者の一人、カガツチは愕然がくぜんとしていた。

首を切断され、床に倒れた同乗者。

そして、おそらくそれを行つたと思われる存在が、眼前にいる。

全身真っ黒の大型だ。

その全体像は、まるで黒い炎が燃えているかのようにゆらゆらと揺れている。

両手に位置する部位は、鋭い刃状。

そして、頭部——赤く丸い目が二つ。

——その両目が、カガツチを見た。

「！」

刹那、カガツチは全身が引き攣るような、硬直するような、そんな感覚に襲われた。体が強張つて、足が動かない。

震えが止まらない。

汗が噴き出し、体表を濡らす。

(……なんだ……こいつは)

モンスターなのか？

それとも、それ以外の何か？

全くわからない……だが。

だが、どこか……その存在感に、オーラに、覚えがある。

そう——まるで——。

「う、うわああああああああ——」

その時、その異形の存在——仮称で『アンノウン』と呼ぶ事にした——の一番近くにいた参加者が、武器を振り上げて襲い掛かった。

あまりの恐怖、焦燥じきずのに、耐えられず動き出してしまったようだ。

「バッ……！」

カガツチが制止する暇もなかつた。

——直後、その参加者の首が宙に舞つた。

〈ちょ、待て〉

〈なんだ、こいつ〉

〈運営、やっぱいやばい、ヤバい奴が〉

視聴者達も混乱の坩堝るつぼに陥つてしまふ。

しかしそんな中、アンノウンは渾々と……まるで仕事のよう、己の行動を進めていく。

第二艇——一人目の首が切り落とされた直後、アンノウンの姿がその場から消えた。気付いた時には、三人目の参加者の背後に。

「……はつ!? いつの間にいいい……?」

振り返った三人目の参加者の首が、驚愕の表情を浮かべたままテッキに落ちる。

「う、おおおおおおおおおお……」

四人目の参加者が手にした武器——機関銃を構える。

彼のスタイルは《銃兵》——ミロタリー色の強い格好をした探索者だった。

放たれる銃撃。

しかし、弾丸が通過した後には、既にアンノウンの姿はなく。

「あ、へ」

その四人目の参加者の背後にいた……とわかった時には、彼の首も落ちていた。

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……」

身動きの一つもできないカガツチは、成り行きを見ている事しかできなかつた。

全く目で追えないスピード。

気付いた時には、七人いた参加者の内、四人がやられていた。

残るは——。

「カガツチ様! 動いてくださいまし!」

カガツチに、生き残りの参加者の一人——鈴木メアリーローズが叫ぶ。  
彼女のスタイルは——喧嘩師。

喧嘩師には、恐怖や威圧に対する耐性が強いという特性がある。

メアリーは、アンノウンに対して臆する事なく殴り掛けた。

「もう動けるのは、わたくしとあなたしかおりませんわ! ジリ子ちゃんは戦えません! わたくし達で倒しましょ! —」

現在生き残っているのは、カガツチとメアリー……そして、チッキの上に伏せている黄泉のジミ子。

ジリ子は先程、セイレーンの体を乗つ取るために【幽体離脱】をした。  
まだ靈体が体に戻つてきていないようだ。

いや……仮に戻つてきたとしても、彼女に近接戦闘のノウハウはない。

(……動け! 動け動け動け! —)

カガツチは、頭の中で叫ぶ。

これが最後のチャンスだ。

生死の瀬戸際だ。

今動けなければ、何もできずに死ぬだけだ。

「カガツチ様! —」

メアリーがアンノウンに拳を振るう。

その拳を、アンノウンはゆりかごと揺れるよけいな動きで躱す。

チャンスだ！

撃撃すれば、倒せる…

スタイル——《ヒーロー》……スピード特化の《バイク・フォーム》にフォームチェンジし、敵の背後に回り込め！

…………。

そう、頭ではわかっている。

わかっている、のに……カガツチの体は、動かなかつた。

純然たる恐怖心を植え付けられてしまつたからだ。

「カガツ——」

メアリーが叫ぶ。

その直後——アンノウンが彼女の横を擦り抜けた。

「！」

——鈴木メアリーローズの首もまた、すれ違いやまに同じも留まひぬ速さで切り落とされた。



『メアリーローズやんー』

セイレーンの体から靈体を脱出させ、ジミ子は大急ぎで船の方へと戻つてきいていた。

しかし、もうすぐそこまでとこりといひで——彼女の目に映つたのは、首を刎ねられる鈴木メアリーローズの姿だった。

——同じ船になれて嬉しいですわ、ジミ子ちゃん！

彼女の優雅で屈託のない笑顔が、脳裏を過る。

『うう……わああああああああああ……』

靈体のジミ子は、そのままの勢いで謎の存在——アンノウンに突撃する。

相手が生命体……モンスターであれば、このまま体を乗つ取り操る事ができる。

メアリーの敵討ちに、ジミ子は闘志を燃やしてアンノウンの体に飛び込んだ。

——直後、ジミ子の靈体は、アンノウンの体から弾き出された。

『……!? え……!?』

【幽体離脱】を使用してきて、初めての体験だった。

相手が無機物であるなり、素通りする事もある。

だが、体から「弾き出された」というのは、初めての事。

『まさか……あたしの能力でも体を乗つ取れないくらい、圧倒的なレベルの存在……っていつ事？』

そう思う根拠は、ある。

例えば、影狼。

もしもジミ子が【幽体離脱】を用いて影狼の体を乗つ取れるか、と問われたなら、否と答えるだ

ぬい。

実際にやつてみたわけではないが……直感的にそう思わせる程の何かが、影狼にはあるのだ。  
つまり、このアンノウンは影狼と同じくらいの存在……。

いや、違う。

自分は先程、このアンノウンを見てすぐに思ったじゃないか——。  
その立ち姿、その風格。

まるで、影狼と同じだ——。

その時だつた。

大きな波が第二艇を襲つ。

激しく揺れる船艇。

ジミ子の小さな体が、無抵抗のまま宙に投げ出された。

『あつー』

靈体のジミ子は、慌てて自分の肉体を追い掛ける。

その伸ばした手が、自身に触れるか触れないか、とうとうといひで——。

——ジミ子の体は波に飲み込まれ、海中へと沈んでいった。



「ハアツ……ハアツ……ハアツ……」

メアリーローズも倒され、ジミ子の体は海に落ちた。

第二艇の「テッキ」の上に残つたのは、カガツチのみ。

そしてアンノウンは、真つ赤な目をカガツチに向けて立つてゐる。

〈カガツチ動け！ 戰えよー〉

〈いつもの威勢はどうしたんだ!?〉

〈つていうか、もう逃げようよー〉

〈ザマア！ わ わ 飯がウマイ！ わ わ〉

〈運営向してんの！ もうカガツチ戦意喪失してんつてー〉

〈まだ降参してねえだろー やれるよな カガツチ!?〉

カガツチの個人配信——《カガツチ o f f i c i a l 》のコメント欄も、大混乱と化している。

普段ならコメント一ひとつを気に掛けるカガツチだったが、今はもうそんな余裕はない。

殺される。

無抵抗で、何もできなくて。

圧倒的な実力差のある相手に、為す術なく。

「た……」

スタイル——ヒーロー。

その変身能力によるアーマーは、既に時間切れで解除されている。通常の換装姿となつたカガツチは、ただ震えてアンノウンと対峙する事しかできずじた。

「助け……」

アンノウンが田前に迫る。

まるで何も感じていないかのよう」、カガツチに迫る。

ああ、殺される。

一瞬後、自分の首も切り落とされる。

恐怖と絶望を抱き、カガツチは両田をギュウッと瞑つた。

〈え、なんだって?〉

〈何々? 第三艇?〉

〈影狼が? え、嘘〉

〈おい、マジかよ〉

その時だった。

アンノウンの動きが、ピタリと止まる。

「……?」

来ると思っていた一撃が来ない。

カガツチは、恐る恐る涙で潤んだ両目を開ける。

アンノウンは、カガツチではなく真横を見ていた。

大海原の方向を……あたかも、そちらから何かが迫り来るのを感じ取ったかのよう。

〈影狼だよー 第三艇から第一艇に向かってるー〉

〈どうやつて?〉

〈だから、「飛んで」だよー〉

〈はあ!? わわわわ なんて?〉

〈田畠ジユリヤビ、自分を思いきり投擲させたんだー〉

カガツチは気付いた。

明らかに、アンノウンの気配が変わった。

自分達を相手にしていた時は、まるで羽虫を漬していく程度の雰囲気しか感じ取れなかつたのに。

今、アンノウンは、明確に「警戒」をしている——。

——刹那、まるで砲撃のように飛来した存在が、アンノウンに激突した。

襲來した高速の存在は、両手の剣——沙霧を真正面から叩き込む。

その攻撃を、両の刃を重ねて防御したアンノウン。

「お前が何者かは知らないが」

アンノウンを巻き込み、海上に飛び出しながら。

飛来した存在——影狼は言つ。

「ジミ子さんが心配だ。早急に片付けや」

## 第三話 影狼ＶＳアンノウン

『影狼、これは……』

『…………』

第三艇のデツキにて。

俺は、蘭のスマホに映されたカガツチのチャンネル——カガツチ o f f i c i a l……そのカメラの前で起こっている惨劇を目の当たりにしていた。

第二艇を襲う謎の異形。

その異形の手により、瞬く間に倒されていく参加者達。

そして、海へと弾き出されたジミ子さんの体。

『何何？ 他の船でなんかあつたの？』

『なんだ？ 敵か？ どこにいる？ ぶちのめしに行くぞ』

『第二艇が襲われている。ほぼ全滅だ』

音夜の持つスマホの画面を覗き込むヒバナと白亜ジユラ。

『この異形……一体何者だ。モンスターか？』

『俺の記憶の中にも該当する存在がいません。一体……影狼？』

音夜と蘭が、画面の中で猛威を振るう存在——黒色の異形に関して意見を摺り合わせる。

しかし、そこで俺は既に動いていた。  
第二艇が進んでいるであろう方角と進路を予測し、そこまでの距離を測定。  
そして。

『白亜ジユラ。協力してくれ』

『ん？ なんだ？』

『あっちの方角に向かって、俺を思いきり投げる』

俺の発言に、音夜も蘭も驚いて目を丸くしている。

『正気か？ 何を考えている、影狼』

『影狼、敵の存在は未知数です。それにこの広大な海原を、いくら白亜ジユラの怪力があるからと  
いつて、投擲で横断するなど……』

『よし、任せろ！』

音夜や蘭の言葉を余所に、白亜ジユラは俺の意思通りの行動を取ってくれた。  
俺の腕を掴む白亜ジユラ。